

南半球便り（その 80）：「米・英のレンズを通じない日豪関係」

6 月 27 日

着任以来、この南半球便りで拙文を綴り重ねてきた大きな動機は、「日本における豪州の存在感を高める」、「豪州における日本の存在感を高める」ことでした。言い換えれば、アメリカやイギリスのレンズを通じたオーストラリア観が日本の各界に深く染みついている中、そこをどうやって突き抜けるかが私の問題意識なのです。

1. 英国下院国防委員会代表団の豪州訪問

そんな中、時代の流れを感じさせる動きが最近幾つかありました。

ジョン・スペラー団長率いる代表団がキャンベラを訪問しました。目的は、AUKUS の創設を受けて、英国の豪州との安全保障上の関係を改めて検討することでした。もちろん、その根幹には、インド太平洋地域で高まる安全保障上の脅威に対してどのように対処していくかという問題意識があったことは間違いありません。

ジョンは、私が約 10 年前に在英大使館で政務公使を務めていた頃に知己を得た労働党の下院議員の重鎮です。英国の外交・安全保障に深い知見を有し、日本との関係の重要性を理解する第一人者の一人です。

そんなジョンからの依頼を受け、代表団一行を日本大使公邸でのランチにお招きし、突っ込んだ意見交換をしました。メニューは、カツカレー。中国の麺を基にラーメンを広め、インドカレーを基にカレーライスを広めたのが日本だと講釈を垂れたところ、慎み深い英国紳士、淑女達が仄かに微笑んでくれました（笑）。それよりも、時間が無いときには日本の政治家はこぞってカレーで済ますといったら、爆笑でした。



スペラー団長ら英国下院国防委員会代表団と公邸にて

2. マイケル・グリーン氏の豪州着任

同じ週に、シドニー大学の米国研究所の所長として着任した旧知のマイケル・グリーン氏のキャンベラ来訪の機会を利用し、大使公邸に招き天ぷらカウンターで懇談しました。



議論は白熱し、4時間近くに及んだ

マイケルとは、私が外務省北米2課長の時代に、彼がホワイト・ハウスでアジア担当上級部長を務めていたとの接点があった上、彼がワシントンのシンクタンク CSIS（戦略国際問題研究所）の副理事長の時代に私が日本国際問題研究所の所長代行として、野上国間研理事長と今は亡き日本経済新聞社の春原さんの強力なリーダーシップの下で、「日米富士山ダイアログ」を通じて日米間の知的交流の強化に共に取り組んだ間柄です。

時代が変わり、豪州の地において日米豪の三国間の関係強化に携われるのは、国際情勢の展開がなせる技でしょう。

マイケルが言う、「豪州は米国の最も親密な同盟国」「日本は米国の最も重要な同盟国」というのは、米国の同盟国観を語った至言でしょう。

3. アダムズ大使のご栄転

そんな中で嬉しいニュースは、駐日大使を務めていたジャン・アダムズ大使がアルバニー政権の誕生に伴い、外務貿易省の次官に栄転したことです。日本大使の前には中国大使を務め、北東アジアの情勢には人一倍知見を有する外交官が豪州外交の事務方責任者になったのです。日本としても、誠に歓迎すべき展開でしょう。

7月1日には次官に就任するジャンと日豪関係の更なる発展に向けてキャンベラで緊密に協力していくことが楽しみです。



6月1日、ジャン・アダムズ大使と公邸にて

4. それ自体としての日豪関係

このように見てくると、日豪関係の目覚ましい進展自体が、米国や英国の識者の関心を集めるとともに、豪州外交のエース級の人材が日豪関係にあたっていることがわかります。

米国や英国のレンズを通じずに、日豪関係それ自体を正視する必要性が高まってきたことを如実に表していると言えるでしょう。

残念ながら、日本の大新聞でシドニーに支局を有し、日豪関係を恒常的にカバーしているのは、日本経済新聞だけです。他は、ジャカルタやシンガポールから豪州をカバーしているにとどまります。長年来、日本の経済活動は豪州産のエネルギー資源（石炭、鉄鉱石、LNG等）無くして有り得ず、今や日本を代表する大商社のグローバル利益の半分以上が豪州ビジネスから生まれているとの経済実態があります。そして、今や豪州はクアッドの重要な一角を占め、日本にとって重要で特別な戦略的パートナーとなったという安全保障実態もあります。それでもなお、日本の言論界での豪州の位置づけは変わらないのでしょうか？

であるが故に、蠅螂の斧とわきまえながらも、上記のような事実を日本の皆さんに伝えなくてはならないとの先鋭な意識を持ち続けている次第です。

5. 高まり始めた人的往来

酒井海上幕僚長、富士通の時田社長、ENEOSの宮田副社長、インペックスの上田社長を皮切りに、旅行制限解除後の豪州を訪れる政界・財界・官界の要人が増えてきています。英米勤務を経験した出先の大使なればこそ、是非とも、より多くの方に豪州にお越しいただき、米国や英国のレンズを通じない生身の豪州の重要性を肌身で感じていただければと切望しております。

山上信吾